

アメリカ昔日譚5 海に火輪を！

小林昭美

明治新政府は明治4年大規模な使節団を欧米に送り、西欧の文明をつぶさに観察し、新国家の運営に役立てることにした。岩倉使節団と呼ばれる使節の特命全権大使は岩倉具視（右大臣）をはじめ、副使木戸孝允（参議）、大久保利通（大蔵卿）、伊藤博文（工部大輔）など48名であった。大隈重信は留守番としてのこったものの、明治政府がそのまま外国出張してしまうような陣容である。使節はそれぞれ従者を連れていたので実際にはその倍の規模であった。従者（家来）は数にも入らないのである。

この船には、このほかにも43名の留学生も乗っていた。後に明治憲法を起草することになる金子堅太郎、団琢磨、中江兆民をはじめ、後に津田塾大学を開いた津田梅子、また後に大山巖元帥の妻になる山川捨松などである。

岩倉使節団の壮行会で太政大臣三条実美は「行ケヤ海ニ火輪ヲ転ジ、陸ニ汽車ヲ輾（メグ）ラシ、万里馳駆（チク）英名ヲ四方ニ宣揚シ、無レ恙帰朝ヲ祈ル」と送別の辞を述べている。

一行は明治4年11月12日に外輪船アメリカ号で横浜を出た。アメリカからヨーロッパを10カ月半かけて視察するという壮大な計画だった。しかし実際に帰ってきたのは1年10カ月後であった。

幕末に勝海舟らがアメリカへ行った咸臨丸は帆船で、港に出入りするときだけ石炭を焚くというものであったが、岩倉使節団のアメリカ号は外輪船で船の両側に水車がついていて、それを蒸気で動かして進むものであった。「海に火輪を」というのは、これを指している。

岩倉使節団の派遣は当時明治政府の顧問格であったフルベッキ(Verbeck)の発案によるものとされ、欧米先進国の制度、財政、経済、産業、軍事、社会、教育などの分野にわけて、使節の一人一人に担当する分野が定められていた。そのため、岩倉使節団の報告書は40以上が残されているという。それをまとめたものが久米邦武の『米欧回覧実記』である。

岩倉使節は政府の要人だったので、この時期に西欧の文物についてはかなりの知識をもっていたが、制度の運用などについては知らないことが多かったようである。例えば、病院というものは誰が建設し、診療・治療の料金はどのようにして決まるのか、というようなことを細かく質問している。

例えば、「新約克（ニューヨーク）府ノ記」はバイブル会社、少年教会、躰児院、新聞社、電信総局、牡蠣の養殖場などを訪ねている。そのなかでバイブル会社では「信教ノ徒ヨリ金ヲ贖シテ、経文ヲ世界ニ弘メンカ為メニ、コノ会社ヲ建テ、当時ハ已ニ三十数種ノ国語ニ訳シテ各国ニ売出スト云」といって驚いている。「総テ経文ハ、欧米ノ人、每家各人、必ス所持セサルベカラズノミナラズ、半月ノ旅行ニモ、必ス手ヲ離スヘカラサル書ナリ」としている。さらにこれは日本では四書五経、仏典の如きものであると見ている。「四書五経ノ我日本ニ行ハル、二千年ニ及ヘトモ、之ヲ読ムヲ解セルモノ、士人中ニテ僅ニ幾部分ニオルノミ」

と記している。そして、一人ひとりに支那語訳の聖書を贈られている。

岩倉大使や木戸・大久保など四副使は、五人の書記官をしたがえて、ホワイトハウスを訪れて第十八代大統領グラントと会見し、国書を捧呈している。この時、岩倉大使、副大使は衣冠、書記官は直垂（ひただれ）をつけ、それぞれ帯剣していたという。一行は国会議事堂も訪れている。

「コンGRES」ハ、米國最上ノ政府ニテ、大統領ハ行政ノ権ヲ総ベ、副大統領ハ立法ノ長トナリ、大審官（チーフヂョッチ）ハ司法ノ権ヲトル。是当國聯邦政治（ユナイテツトステート）ノ大綱ニテ、其立君國ト対面ヲ異ニスルナリ。

久米邦武の『米欧回覧実記』はお役所の出張報告だから、建前を述べているが幕末に同じくアメリカを訪れた万延元年遣米使節の副使村垣範正の日記『万延元年第一遣米使節日記』と比べてみるとおもしろい。

閏三月廿八日 陰 十二時に大統領の謁見なれば、けふをはれと、とりどり支度せしが豊前守新見正興狩衣（鞘巻太刀）、をのれ同じく（毛抜形太刀）、、四馬の車に乗（車の覆を後へはねたり）をのれ等も下司もけふは供を連れたり、客舎を出れば、先に鼠色の羅紗の筒袖きたるもの二十人ばかり立並び次に楽人三十人、騎兵五六騎、次に御國書入の長持、赤き革覆ひ掛たるを柁に入昇せ、、順々車に乗つれ、、樂を奏しつゝ行に、大路と所せまきまで物見の車、はた歩行の男女群衆かぎりなし、をのれは狩衣を着せしまゝ、海外には見も馴れぬ服なれば、彼はいとあやしみて見るさまなれど、かかる胡国にて皇國の光をかがやかせし心地し、おろかなる身の程も忘れて、誇り貌にて行くもおかし。

としている。万延元年の使節は宿泊したウイラードホテルはホワイトハウスの眼と鼻の先にある。そこを四頭立ての馬車で行ったのである。現在でもウイラード・ホテルの玄関ホールに使節団の宿帳などが展示してある。一行はアメリカ大統領があまりに質素な服装をしているのに驚いている。

大統領は總督にて、四年目毎に國中の入札にて定けるよしなれば國君にあらざれど、御國書も遣されければ、國王の禮を用けるが、上下の別もなく、禮儀は絶てなき事なれば狩衣着せしも無益の事と思はれける。

ゑみしらも あふぎてぞ見よ 東なる 我日本の 國の光を

村垣範正の日記は歌日記になっていて、その時々を思いを短歌にしている。当時中国の清朝では皇帝に会うのには三壘九叩頭の礼、つまり三回膝まづいて前進し、その間に三回づつ計九回額を床にこすりつけて進む、というのが皇帝に対する正式な儀礼として求められていた。岩倉使節は「禮儀は絶てなき事なれば狩衣着せしも無益の事と思はれける。」とアメリカの儀式があまりにも簡素なのに失望している。

議事堂についてはつぎのようにある。

四月四日 晴 午後に kongress 館に行の約なれば、例の人々が案内して車にのりて七八町東へ行ば、kongress 館に至る。、正面高き所に副統領（ワイスフレスシテントといふ）前に少し高き臺に書記官二人、其前圓く椅子を並べ、各机書籍夥しく設け凡四五十人も並居て、其中一人立て大音聲に罵、手眞似などして狂人の如し、何か云ひ終りて、また一人立て前の如し、、國政のやんごとなき評議なりと、例のもゝ引掛筒袖にて、大音に罵るさま、副統領の高き所に居る體杯、我日本橋の魚市のさまによく似たりと、ひそかに語合たり。

ペリーが来航した嘉永6年（1853年）から万延元年（1860年）までは7年。万延元年の遣米使節はまだ外国は礼節に欠き、野蛮であると考えていた。「かかる胡国にて皇国の光をかがやかせ」ということばのなかには尊王攘夷の痕跡が残っている。それから約10年（明治4年）の使節はアメリカの文明や文化、国民についても知識は深まっていた。しかし、新たなナショナリズムが芽生えていなかったわけではない。

現在の国際関係ではどんな国も国家としては原則として対等の外交関係をもつことが建前となっている。しかし、中国文明だけが文明であった鎖国の時代には、国家の関係は朝貢によって成り立っていた。一方が主であり、他方は従であった。そのなかでは主従の関係を示す儀礼が大切であった。ところが、アメリカには君主もなく礼も簡素であった。それは胡（外国）であった。しかし、その夷狄の國には火輪があり、汽車があり、もうひとつの文明が花咲いていた。

異なる文明に接すると誰でも最初は違和感をもつ。自分を守るために人はナショナリズムになり、あるいは国を守るために鎖国する。ナショナリズムは盲目になりやすく、危険かつ愚劣な独善に陥りやすい。アメリカがモンロー主義を掲げたのも、反共主義を強く打ち出した時期があったのもナショナリズムだったのではなかろうか。アメリカには今も排外主義、反共主義があり、反自由貿易の底流は流れている。

【予告編】

第6話 Back to 1960's

第7話 帰国—日本文化圏再突入

第8話 アメリカ再訪

第9話 アジア回帰

第10話 アメリカ NOW